



広島高等師範学校における満韓修学旅行

宋, 安寧

(Citation)

研究論叢, 12:59-69

(Issue Date)

2005-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008644>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008644>



広島高等師範学校における満韓修学旅行

宋安寧（神戸大学総合人間科学研究科博士前期課程）

はじめに

1886（明治19）年2月、東京師範学校の行った生徒の千葉県房総半島への「長途遠足」を嚆矢とし、日本の修学旅行はすでに百年以上の歴史をもっている¹⁾。そして、「日本の小・中・高校生の九割強が修学旅行を経験する。修学旅行は、国民誰もが一定の年齢ごとに経験する普遍的な行事であり、一種の『通過儀礼』ともいえる」ほど、修学旅行はきわめて日本的な教育システムであり、日本文化の一つの特色ともいえる²⁾。

近年、異文化理解教育の一環として、高校生の海外への修学旅行も頻繁に行われている。文部科学省が公表した「平成14年度高等学校等における国際交流等の状況」によると、公、私立高校生の海外修学旅行の行先国の数は25ヶ国となり、参加者人数の順位から見ると、中国が第一位となり、201校、36,607名であった。その次は韓国であり、231校、35,364名であった。

中国、韓国への修学旅行は近年新しく始まったわけではない。かつて日本の植民地であった中国東北地方および朝鮮半島への大規模な満韓修学旅行と呼ばれる修学旅行があった。日露戦争終結直後の1906（明治39）年から始まり、学生生徒の満支旅行禁止の方針が出された1940（昭和15）年まで続けられた満韓修学旅行は、普通の修学旅行と等閑視すべきではなく、かつ修学旅行史において看過してはならない重要な歴史的事実である。

しかし、満韓修学旅行に関する研究はまだ緒についたばかりである。渡部宗助「中等学校生徒の異文化体験—1906（明治39）年の『満韓大修学旅行』の分析」（『国立教育研究所研究集録』21、1990年）は、新聞、雑誌を幅広く用い、1906（明治39）年の満韓修学旅行の実施概況を緻密に考察した論文であり、管見の限り教育学の視点から満韓修学旅行にアプローチした唯一の研究である。渡部は、陸軍による乗船無料という便宜提供が旅行者を通じて国民に満韓を宣伝するというねらいを有していたこと、参加者の教員たちは満韓旅行を肯定的に評価したことを指摘した。ただこの研究は、1906（明治39）年の満韓修学旅行を概観的に考察したものであり、一つの中学校の生徒と先生の旅行記を取り上げたが、旅行の全体像には触れていない。

高媛「『新天地』への旅行熱——『観光楽土』に第一歩を」（『観光文化』第151号、2002年1月）は、観光学の視点から満韓修学旅行の検討を行ったものであり、「満洲国」建国後の満韓修学旅行を概観した上で、「この時代を実施された修学旅行は、満洲国の発展の現状と先輩たちの活躍ぶりを確かめ、ひいては就職するための下見旅行の性格を強く帯びようになった³⁾」ということを指摘した。

三谷憲正「日本近代の朝鮮観——明治期の満韓修学旅行をめぐる」（『Gyros』第11号、2005年2月）は、1906（明治39）年の満韓修学旅行の状況を、渡部の前掲の

研究では使われていない『読売新聞』『東京朝日新聞』を使用し考察したものである。また、広島高等師範学校の満韓修学旅行も取り上げ、旅行記『満韓修学旅行記念録』の序に書かれている校長北條時敬の言葉を「帝国主義の理論」として批判したが、生徒たちが書いたものには注目していない。

満韓修学旅行の性格を解明するためには、一つの学校の事例を取り上げ、一回の旅行における全体のプロセスおよび生徒の旅行記を詳しく分析する必要があると筆者は考えている。学校側が具体的にどのような目的をもって満韓修学旅行を行ったのか、その目的は達成されたのか、生徒たちは旅行から何を学んだのか、などの質問に答えるには、具体的な事例研究の蓄積が必要である。

本稿では、軍との関係、校長北條時敬から見た満韓修学旅行、生徒側から見た満韓修学旅行という三つの視点から広島高等師範学校の1906（明治39）年の満韓修学旅行の性格を解明する。

I 軍との関係

1 陸軍の「期待」

日露戦争の戦果として、日本はロシアから「満洲」の経営権を獲得すると同時に、第二次日韓協約を締結した。これにより、日本国民大衆の満韓に対する関心が一挙に高まった。

1906（明治39）年6月22日、『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』両紙は、「空前の壮挙（満韓巡遊船の発向）」という大型の社告を掲載し、参加者を募集した⁴⁾。このような満韓巡遊船の就航によって、教育界か

ら満韓修学旅行の要求が起こった。この要求に対応するため、6月27日陸軍省は、中学校程度以上の学校生徒が夏季休暇を利用して満韓地方に旅行しようとする場合、学校職員が付き添い団体として行動するのであれば、御用船の無賃乗船その他の便宜提供を与えるという通牒を出した⁵⁾。7月1日、文部省は「文部省及陸軍省が本夏学生の満韓地方に旅行せんとするものに対し多大の便宜を与え其挙を奨励する」⁶⁾ということを各学校に知らせた。これによって、満韓修学旅行の気運が一挙に燃え上がった。

朝日新聞社の満韓巡遊船の企画から、満韓修学旅行の気運が燃え上がるまでの経緯の中で、注目したいのは、陸軍の便宜提供という点である。この点について、前掲の渡部の研究と有山の研究では、陸軍の便宜提供が、最初から意図的に企画したのではなく、下からの要求に対応するために出されたものであったと指摘した。

国民大衆が戦勝の喜びに酔っていたのに対し、陸軍省はおそらく戦後の軍隊の疲労回復および満韓の戦後経営を思慮していたと考えられる。そのような陸軍省が意図的に学生の満韓修学旅行を企画する余裕はなかったと考えられるが、北海道から沖縄まで希望者を募集して、計3500余名を四班に分けて各々4週間にわたって、船舶・鉄道運賃無料で満韓旅行を実施することのメリットは、「長期的に見て十分ペイすると当局は判断したのであろう」⁷⁾。

陸軍の「期待」に関する直接的な法令は見つからないが、傍証として、広島高等師範学校の生徒たちが戦跡見学の時に受けた陸軍少将の講話の一部を引用しておこう⁸⁾。

我が陸軍大臣が諸君の為に便宜をはかりて親しく満韓の地に遊ばしめ忠臣義士が熱血を注ぎたる新戦場を弔はしむる所以のものも国家が第二の国民たる諸君に待つ所あるによらずんばあらざと。

つまり、生徒たちに陸軍の兵士たちが戦った場所を見せて、将来国家のために貢献させるという「期待」がそこに存在していた。

朝日新聞社の満韓巡遊船の場合、30日の旅程で最下級のクラスである丁種の乗船の旅費は18円であった。これを当時の小学校教員の月給と比較すると、尋常小学校正教員は人口十万以上の都市の場合16円、高等小学校正教員は同じく20円であり、丁種の乗船賃だけでも小学校教員の月給ほぼ一ヶ月分にあっていた⁹⁾。こう考えると、陸軍省は3694名¹⁰⁾の生徒に対し、相当な費用をかけたことになる。日露戦争に多額の費用をかけ、経済的な余裕が十分であるとは言えない終戦直後に多額の費用を満韓旅行に投入したことは、やはり「期待」が存在していたことの証左である。

では、陸軍の「期待」はどのように満韓修学旅行に現れたのか、広島高等師範学校の満韓修学旅行の実態を見てみよう。

2 旅行の実態に見る陸軍との関係

1) 現地到達まで

広島高等師範学校の「北条時敬校長以下教職員ならびに本科、予科、研究科生徒有志者140名」は1906（明治39）年7月19日広島を出発し、本隊は8月12に帰校し、支隊は韓国を経て同月15日広島に帰着し

た。これが広島高等師範学校における最初の修学旅行であった¹¹⁾。なお筆者の関心は満韓旅行の「満洲」¹²⁾部分にあり、以下本隊の旅行に注目し、朝鮮半島は分析の対象に入れない。

「満洲」に到達するまで、生徒たちは陸軍からどのような影響を受けたのか。3点に着目して見てみよう。

1点目は、軍人からの講話である。7月13日、生徒は藤田嗣章第五師団軍医部長より「満洲」旅行に関する同部長の戦時中の経験に基づいた衛生上の講話を受けた。「風土服合の要」、「注船病予防法」、「彼地上陸後の衛生法」などの衛生上の注意点以外に次のような講話も加えられた¹³⁾。

戦勝の結果諸君等が容易に彼地に到り
気象地理、地勢其他各種百般の事物に
就き探求せられるの機に遭遇したるは、
国家の大に慶賀する所なりとす。……
這般諸君の修業旅行は、単に諸種の研
究のみならず、一面社会に対し一種責
任あるものを覚悟せざるべからず。

この講話を見ると、単なる衛生講話だけではなく、生徒たちが満韓修学旅行に参加することが国家の重要な出来事であり、国家に対する生徒の責任でもあることが指摘されたことが分かる。

2点目は、陸軍省から文部省に知らせた旅行学生に対する心得の内容である¹⁴⁾。

団体の監督者は学校の責任ある職員たる事。

旅行監督に関しては陸軍に於いて責を有せざる事。

一団は逐次数個の組に分割し各組に其の長を置く事。

旅行者は各人毛布一枚外套水筒及飯行李等を携行せしむる事。

一船舶便乗に関しては加なず文部省を経て陸軍運輸部本部に照会の事。

陸軍取扱を受くる間は陸軍の法規命令に従ふは勿論軍事上の機密（配兵及び軍事上の設備等）を守るべき事。

不発弾又は銃葉制手投弾（缶詰の空缶を利用したるものあり）等を発見した場合あるも之に手を触る可からざる事。

旅行者は其学校の制服を着し一団体の人員は約百名内外とす。

この心得に見るように、陸軍側は、旅行団の編成、医師の配置、携帯品、船内でのルール、服装など旅行に対して細かく規定した。この指示に従って広島高等師範学校は旅行の準備を行った。出発に際し、広島高等師範学校では生徒に雑囊、蚊帳、飯行李・網袋、水筒、水呑、缶きり、帽子日蔽などの旅行用品を配った。その後、団体編成を行われた。旅行団は監督、各部、組という三つの階層からなり、北條をはじめとする監督が総責任者であり、その下に置かれた庶務部、会計部、医務部、指導部を監督する。各部の責任者は、2 名以上の教師が担当した。指導部の下に五つの組が置かれ、専門によって分けられ、責任者の教授とは別に組長が置かれ、高学年の生徒たちが担当した。

3 点目は船中講話である。

広島高等師範学校の修学旅行隊は東京帝国大学、第一、第二高等学校、学習院、美

術学校、外国語学校、大阪高等商業学校、大阪高等医学校など約 10 校の学生と一緒に小雛丸に乗った¹⁵⁾。船中で、生徒たちは、沖島の上陸丸の遭難事件、巨文島の軍事上の重要性、日露戦争の「海軍の仮根拠地」と言われる八口浦の説明を船長から受けた。沖島を通ったとき、「(小雛丸) 海面上に一大回転をなして、一同礼を行い、一声の汽笛を相図として万歳を三唱し、終わりに君が代の合唱をなしぬ」¹⁶⁾。また、広島高等師範学校が行った茶話会には関東総督府経理部の辻村氏も参加し、生徒に満洲談を講じた¹⁷⁾。

以上の 3 点から見ると、現地に到達するまでに広島高等師範学校の満韓修学旅行はすでに軍と密接に関わっていたことが分かる。実際に満韓の地に着いた時も軍との関わりはずっと続けられている。次に満韓の現地での見学実態からそれを見てみよう。

2) 現地での見学の実態

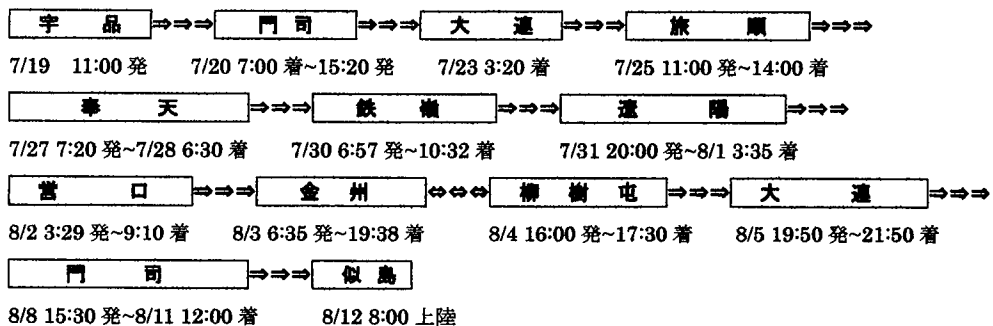
4 泊の船中生活を経て 7 月 23 日の午前 3 時 20 分、生徒たちは「満洲」の玄関と言われた大連に到着した¹⁸⁾。生徒たちはどのようなルートで移動したのか。図 1 はそれを示したものである。移動に使用した鉄道は、ロシアによって 1903 年に完成された東清鉄道の南満洲支線（ハルビンから大連までの 772 キロ）であった。移動中、各駅で陸軍から湯茶の提供を受けた。

生徒たちは「満洲」のどこを訪れ、何を見学したのか。見学の際、軍側とどのように関わっていたのかを見てみよう。表 1 は見学場所の一覧である。

表 1 を見ると、見学場所の多くが日露戦争の戦跡であったことが分かる。戦跡を生

徒たちはほぼ全部訪れた。それ以外に史蹟、資源地、教育機関などを見学した。

図 1 行程路線図



【註】小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第9巻、ゆまに書房、1997年6月、28～38頁より作成。

宇品、門司以外、「発」は枠内の前の土地の出発時間、「着」は枠内の土地への到着時間を指す

ここで、主に陸軍と関わっていた戦跡での見学実態を見てみよう。旅行中生徒たちはどれぐらい戦跡を見学したのか。表 2 はそれを示すものである。表 2 を見ると、生徒たちは 10 ヲ所の戦跡で、7 名の陸軍軍人から説明を受けたことが分かる。25 日間の旅行のうち、満州での滞在日数は 16 日であ

り、移動時間を除いて、ほぼ半分の時間が戦跡見学に費やされた。「列を整え陸軍より附せられたる案内の士官に従い」、「各所に於いて案内者の精細なる説明あり」¹⁹⁾というように、陸軍士官からの戦跡説明を整理して聞くのが戦跡見学の固定されたパターンであった。

表1 見学都市および場所の一覧

都市	戦跡	史跡	教育機関	資源地	その他
大連			公学堂高等尋常小学校		民政庁、老虎灘、露西亜町
旅順	大案子山、椅子山、203高地、黄金山、戦役記念品陳列場、古戦場、旅順港				
奉天		北陵、宮城、文瀾閣、北塔			市内、劇場
撫順	首山堡、戦没忠魂碑、角面堡			千金寨採炭所	
鉄嶺	東方高地	慈清寺	学校	馬蜂溝	日本商品陳列場
遼陽		関帝廟、蓮華寺	師範学堂、中華女学校、八旗学堂		監獄署
营口				豆粕製造所	日本軍政署
金州	南山、鎮魂碑、彰忠碑		南金書院		
柳樹屯	東南記念碑				市街

〔註〕小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第9巻、ゆまに書房、1997年、28～38頁より作成。

表2 戦跡見学回数一覧

日付	場所	説明者
7.25	案子山、203高地	陸軍文官
7.26	黄金山、古戦場、旅順港、戦利品陳列場	陸軍将校 海軍兵曹
7.30	東方高地	陸軍将校
8.1	首山堡、	陸軍将校
8.4	南山	伊崎少将
8.5	東南記念碑	陸軍将校

[註]小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第9巻、ゆまに書房、1997年、23～28頁より作成。

では、生徒たちは戦跡で何を見たのか。旅行記を見ると、砲壘の数、交戦の実態、戦争地形図、沈没戦艦の名称および位置、戦況の説明など日露戦争について詳細に記録していたことが分かる。

なぜ生徒たちは日露戦争に関し詳細に記録できたのか。その影響の理由は、主に陸軍将校による詳しい戦跡解説であった。そのことは、英語部生徒の日記の中にある「今実戦に臨める将校の言を聞くに」²⁰という記述から分かる。また事前の日露戦争に関

する事前の学習にもよっていた。

戦跡見学だけでなく生徒の宿泊も陸軍と関わっていた。旅行中の生徒の宿泊先は表3のとおりである。表3を見ると、宿泊は船中泊、車中泊以外、すべて軍用宿舎であったことが分かる。

以上、準備段階において陸軍将校の講話を聞いたこと、軍の要求に従って団体編成を行ったこと、旅行中において陸軍将校からの戦跡説明を聞いたこと、軍用宿舎を利用したことなど、広島高等師範学校の満韓修学旅行はつねに陸軍と関わっていたのである。

表3 宿泊先一覧

日付	宿泊先	日付	宿泊先	日付	宿泊先	日付	宿泊先
7.19	船中	7.25	海軍宿舎	7.31	車中	8.06	営兵所宿舎
7.20	船中	7.26	営兵所宿舎	8.01	営兵所宿舎	8.07	営兵所宿舎
7.21	船中	7.27	車中	8.02	兵站部宿舎	8.08	船中
7.22	船中	7.28	営兵所宿舎	8.03	営兵所宿舎	8.09	船中
7.23	営兵所宿舎	7.29	営兵所宿舎	8.04	営兵所宿舎	8.10	船中
7.24	営兵所宿舎	7.30	営兵所宿舎	8.05	営兵所宿舎	8.11	船中

[註]小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第9巻、ゆまに書房、1997年、28～38頁より作成。

II 北條時敬からみる満韓修学旅行

1 北條時敬の「期待」

広島高等師範学校の初代校長北條時敬は、

教師を国家教育の担い手とみなし、生徒に対して報国の観念を強固にすべきことを力説した。北條は国家主義を全面的に肯定し、卒業生に対して国家教育の志士となれと説

いた²¹⁾。教育演習を重視した北條は、演習に関する訓示のなかで「忠君愛国は普通教育の根本主義なり。諸子は如何なる学科を担当するも生徒児童の教授訓育に従い以て教育上の効果を致すことは畢竟此根本主義に帰着することを期すべし」と、忠君愛国を強調した²²⁾。

このような国家主義色彩の強い教育理念の持ち主である北條は、満韓修学旅行を「学生教養に関する著大なる一事業」²³⁾と位置づけ、出発の際に次のような訓示を行った²⁴⁾。

今回の満韓修学旅行が国家の学生を厚待せるによることを明らかにし、学生は須らく成業の後国家に報ぜんことを期すべきこと、国運勃興の時に際し人各一分の責を尽すことを勉むべき……修学旅行をなす以上、彼地戦時の跡を尋ねるは固より、満洲地方の認識を深めることに努むべき。

以上の訓示から北條の満韓修学旅行に対する二つの「期待」が読み取れる。

一つ目は、国家の「厚待」を受け満韓修学旅行を成し、成業の後国家に報いるべきという期待である。

二つ目は、表1に見るような見学を通し深く満洲を認識するという目的の達成である。二つの「期待」は緊密につながっていた。後者が前者に達する手段であり、つまり戦跡見学を通じ生徒に忠君愛国の念を養成させ、深く満韓を認識するのを通じ生徒の将来国家に報いる責任感を促そうとしたのである。

2 北條時敏の中国観と植民地教育観

北條は『満韓修学旅行記念録』の序文に次のように記した²⁵⁾。

蠢々たる愚民の労役するは原野に群する豚に似たり。是等は一つとして愛国の精神を作興し、人類慈愛の念を喚起せざるものなし。……天地廓開、風光雄大にして、其恵沢は吾人の自在に之を取りて我気象を養うに委せられたり……武力を以て発展したる国勢伸張は彼の如く偉大なりき。今後平和的に国民の勢力を確立するに必要な人事上の基礎は何なるか。殖民的国民の性格は如何にして養うべきか。外国人と安寧幸福を共有して海外に信義を維持し、而して優勝の地位を占むべき商業者の素養は如何にすべきか。半開陋俗の地を文化に導かんと欲する意志と、劣等人種を愛撫する情念とを養ふことは移住国民に対し目下要求すべき事項に非ざるか

この文章から北條の中国観と植民地教育観が窺える。北條は当時の中国を「半開陋俗の地」と、中国人を「愚民」「劣等人種」と見なした。

「武力を以て発展したる国勢伸張」によって「半開陋俗の地」を獲得した後、「外国人と安寧幸福を共有して海外に信義を維持し」「半開陋俗の地を文化に導かんと欲する意志と、劣等人種を愛撫する情念とを養ふ」が必要であり、移住民である日本人によって「平和的」に文化を植民地に導入することこそが北條の植民地教育観であった。移住民の教育の任務を北條は満韓修学旅行に参加する生徒に期待している。前述した旅行出発際の「成業の後国

家に報ぜんこと」、「国運勃興の時に際し人各一分の責を尽すこと」との訓示の内容には生徒の卒業後の満韓活躍という「期待」が含まれているといえよう。これに関して『創立四十年史』には、次のように記されている²⁶⁾。

本校が教育上の一大使命として植民地教育を志すに至ったのは、既に初代校長北條時敏によって創められたものであって、而して卒業生が漸次朝鮮南満洲乃至支那方面に進出し、其の教育上の実績が漸く認められるに至ったことは、我が学園の発展の為のみに止まらず、広く我が国外地教育の確立上特筆に値する事であり、更に将来十年二十年五十年の後に於ける本校卒業生の彼地への進出に想到すれば、我が国外地教育の発展は期して待つべきものがある。

それによれば、植民地教育が広島高等師範学校の一大使命と見られ、北條によって創始されたということである。その「成果」の実証は今後の課題に譲りたいが、『満韓学旅行記念録』の序文から北條の植民地教育を志すという意向は確かに窺える。

Ⅲ 生徒の側から見た満韓修学旅行

1 北條の「期待」との一致

前述したように、北條は満韓修学旅行に生徒の卒業後の報国と戦跡見学および満韓事情調査ということを「期待」していた。「生徒の卒業後の報国」についての実証は今後の課題に譲るとして、生徒たちはどのように北條の「期待」に応えたのかについ

て生徒の旅行記から探ってみよう。

繰り返し戦跡見学を経験した生徒たちは、「正しく死者の名残、ああ幾多の精霊。大君の御為に。国家の為に。吾等を安全ならしむる為に此の山上に血を流し、骨を碎いて果てにしか。ああ卿等の魂を慰むるは実に吾等の任なるなり」²⁷⁾などの感想のように、兵士たちが国家のために命を投げ出して奮闘したことに感銘を受けた。

満韓事情に関しては、出発当初の職務分担のとおり、社会一般の観察を担当する英語部、地理歴史に関する事項を担当する地理歴史部、戦争に関する事項を担当する数物化学部、文学博物学に関する事項を担当する国漢博物部、戦時中の事跡ならびに一般状況を担当する予科というように、それぞれに綿密な記録を残した。彼らの記録には当地での説明はもちろんのこと、事前の「満洲」に関する講演、関連する書物の学習の成果などが反映して、北條の望んだとおりに戦跡見学および満韓事情調査という旅行の主要な目的は実現されたといえよう。

2 生徒たちの中国および中国人観

生徒たちの旅行記を分析する場合大切な点は、当時の中国および中国人をどのように見ていたのかということである。

「土民は太古の民の如く自ら支那風を表はして余蕆なし」²⁸⁾、「村落の家に至り……上古穴居の状態を思はしむるものあり」²⁹⁾、「彼方の禿山此方の広野には数十数百より成れる牛馬豚羊の群を見る……其様子如何にも太古的にして尚ほ未だ古風を脱せず吾人をして文華の光に浴びざる素朴の風を偲ばしむ」³⁰⁾とのように、生徒たちにとって、当時の中国は太古の原始状態に見えた。

また当時の中国における初等教育機関である書房の教育の様子を、ある生徒は次のように描いた³¹⁾。

学級の別ありとは見へず。字を習ふ者あり、書を読む者あり、宛も我邦往時の寺小屋の如し。壁間には教育掛図数葉を掲げたるが皆本邦の製なり。教科用書を見れば孟子、大学ありまた新式の国語読本あり。新旧分子の未調和せざること之に由って知るべし。国語読本は商務印書館の発行にして、其体を我等尋常小学読本に倣へるものなり、是を孟子大学に比ぶれば程度の懸隔霄壤も尠ならず。然るに彼等は甲を読み、乙を読み更に其差を知らざるが如し知るべし彼等の学ぶ所は文字の形式にありて、内容の精神にあらず。彼等が頭を左右に振り、其律動に伴ひ一種の曲節を附して読誦せるを見れば、暗誦万能主義は未彼等の頭脳を去らざるなり。是に由って之を觀れば新学の影響は只皮相に止まり其精神は未解せられざるが如し。我明治初年の小学教育も之に較べては勝ること万々なりしならん。

広島高等師範学校の生徒たちにとっては、当時の中国の初等教育のレベルは日本の寺子屋レベルにすぎず、子どもの学習も内容を理解せずにとだ丸暗記を行う「暗誦万能主義」のものであった。教育用の掛図は日本から導入されたものであり、教科書も日本のものをまねて作られたものであることも指摘された。

清末以降、中国において旧教育を否定し、明治維新に成功した日本の教育制度に学んで近代学校制度の創設が図られた。しかしその内実は、広島高等師範学校の生徒たちから

見れば、表面的なものに留まり、ほとんど不十分なものであった。

当時の中国人に関しては、「挙動に敏活を欠き概して時間を空費する傾向ある」³²⁾、「支那人の公共心に乏しきは道路の破壊せるによりて之を知るべく、草生ずるも之を抜かず汚穢堆積するも之を放置し道路を厭はず糞尿を散えてするに至りては不潔を極めざらんとするも得ざるなり……蓄財利己の念に急にして文芸を尚び雅致を解する遑なきが如し……満洲においては到底我国に於けるが如き高尚優雅纖巧妙麗の趣味の痕跡だに認識すること能はず」³³⁾などの指摘のように、生徒たちは当時の中国人が怠惰で、公共心に欠け、不潔で利己的で、高尚な趣味をもたない存在であると見ていた。その表現は中国人に対する蔑視観に満ちあふれていた。

ただ生徒たちは中国人に対し蔑視観だけもっていたわけではなく、中国人の優れている点も見出しそれに学ぶべきであるとの見方も示していた。

例えば「耐忍力強くして能く久しきを持するは能く之を償ふことを得べし。農民は概して質朴率直なるが如し。……商人にありては……其商業上の信用を重んずる点には我商人の就て学ぶにたるべきものあり」³⁴⁾のように、忍耐力が強く、素朴かつ正直で、商業上における信用を重視するというような優れた点を指摘した。また「教師に対する観念は最も深く父兄も亦之を曲ぐべからず。先生がと云えば凡ての事聞かれざるなく教師はたとえ樞機を纏うと雖も尊敬せられざるなし。実に教師となるは役人たるよりも名誉とする所なり」³⁵⁾と述べ、中国人が教師を尊敬する観念を有していることを評価した。

肉体労働者である「苦力」に対し、生徒たち

は「その勤儉貯蓄の美風は我労働者の企て及ばざる所にして以て其規範となすに足るものなり……彼等は吾人が容易に学び難き克己主義を実行せるものなり」³⁶⁾と、「苦力」の勤儉さ、克己主義を指摘し自ら学ぶべきだと述べた。

さらに生徒たちは、「彼等の賃金は極めて低廉なれどもこれに比して数等の低廉なる費用を以て生活し厘毛を積みて数百金となす。是れ即ち雇主の便利なる条件にして満洲に於いて苦力が一大勢力を有し年々数万の渡来者ある所以なり」というように、「苦力」の低賃金の労働に同情を示すとともに、暗に雇主を批判した。

おわりに

本論文では、陸軍、学校、生徒という三つの角度から広島高等師範学校の1906(明治39)年の満韓修学旅行を分析し、次の3点を明らかにした。

第1点は、この満韓修学旅行は当時の陸軍省と文部省の協力による満韓大修学旅行のブームの中で行われたために、旅行の準備段階、船中、満韓での見学、様々な面から陸軍と関わっていたことである。

第2点は、この満韓修学旅行の実施は、生徒の成業後の報国、戦跡見学と満韓事情調査の両目的の達成を期待した広島高等師範学校の初代校長北條時敏のリーダーシップによるところが大きかったことである。

第3点は、生徒の視点から見ると、北條の望んだ目標が達成されるとともに、生徒たちは近代化に遅れた国という中国観と、怠惰で不潔で利己であるとする中国人観を有した。ただそこには、中国人の優れた点に学ぶべきである感情も見られた。

最後に、この第3点と関って今後の課題に

ついて述べておくならば、それは、満韓修学旅行は一体生徒たちにどのような影響を与えたのかということである。生徒たちは中国や中国人に対する蔑視観を露骨に示したが、これは旅行の中で身につけた考え方なのだろうか。それとも旅行前にすでに身につけていた考え方を実際に確認する言説であったのか。いずれであったのかによってこの旅行の意味は変わってくる。また、ある部分で中国人を尊敬する考え方も示しているが、これが蔑視観とどのような構造で個人の中に位置づいていたのであろうか。

換言すれば、中国が遅れた国であり、中国人は劣った人種であるとする近代日本人の観念の形成過程に、満韓修学旅行はどのように関与したのであろうか。それを解明することが今後の課題である。

註

- 1)『日本修学旅行協会五十年史』日本修学旅行協会、2002年。
- 2)白幡洋三郎『旅行のススメ——昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論社刊、1996年、108～109頁。
- 3)高媛『「新天地」への旅行熱——『観光楽土』に第一歩を』『観光文化』第151号、2002年1月、30頁。
- 4)有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館、2002年、1頁。
- 5)註4)に同じ、25～32頁に参照。
- 6)小島晋治『幕末明治中国見聞録集成』第9巻、ゆまに書房、1997年6月、21頁。
- 7)渡部宗助「中等学校生徒の異文化体験——1906(明治39)年の『満韓大修学旅行』の分析」(『国立教育研究所研究集録』21、1990年)。
- 8)註6)に同じ、184頁。
- 9)註4)に同じ、40頁。
- 10)文部省の統計によると、3500名の募集人員に対し、申込総数は7616名であり、船舶の制限によって、実際の旅行者数は3694名であった。(『教育時論』767号、明治39年8月5日、36頁)。

- 11)広島大学 25 年史編集委員会『広島大学二十五
十五年史』包括校史、1977 年、36 頁。
- 12)表記について、筆者は野村章『「満洲・満
洲国」教育史研究序説』エムティ出版、1995
年、16 頁～17 頁の解釈に賛成し、以下は「満
洲」、「満洲国」で表記した。
- 13)註 6)に同じ、462 頁。
- 14)『帝国教育』309 号、明治 39 年 7 月 15 日、
45 頁。
- 15)註 11)に同じ、28 頁。
- 16)註 6)に同じ、130 頁。
- 17)註 6)に同じ、130～132 頁。
- 18)註 6)に同じ、30 頁。
- 19)註 6)に同じ、31 頁。
- 20)註 6)に同じ、103 頁。
- 21)三好信浩『日本師範教育史の構造』東洋館
出版社、1991 年、387～388 頁。
- 22)註 21)に同じ、199 頁。
- 23)広島文理科大学 広島高等師範学校『創立
四十年史』1942 年、131 頁。
- 24)註 23)に同じ、133 頁。
- 25)註 6)に同じ、13～15 頁。
- 26)註 23)に同じ、165 頁。
- 27)註 6)に同じ、47 頁。
- 28)註 6)に同じ、49 頁。
- 29)註 6)に同じ、80 頁。
- 30)註 6)に同じ、106 頁。
- 31)註 6)に同じ、328 頁。
- 32)註 6)に同じ、79 頁。
- 33)註 6)に同じ、81 頁。
- 34)註 6)に同じ、79 頁。
- 35)註 6)に同じ、196 頁。
- 36)註 6)に同じ、196 頁。